

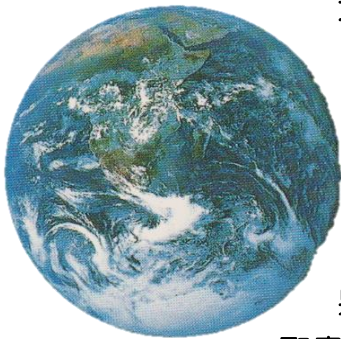
カトリック香里教会 年間第 33 主日 2021年 11月 14日

— ダニエル 12章・1-3、ヘブライ 10・11-14、18、マルコ 13章・24-32 —

〔そのとき、イエスは弟子たちに言われた。〕「それらの日には、このような苦難の後／太陽は暗くなり／月は光を放たず／星は天から落ち／天の諸力は揺り動かされる。その時、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。その時、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、選ばれた者を四方から呼び集める。」

「いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が出て来ると、夏の近いことが分かる。それと同じように、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。よく言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、私の言葉は決して滅びない。その日、その時は、誰も知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。」
-マルコ 12章-

その日



地球の美しい自然を「世界遺産」として紹介している番組で、人工では成し得ない、自然の神秘的なある造形美の成り立ちを「ここまでになるために8千万年という歳月がかかりました」と解説していました。

気が遠くなるような歳月を経てきた地球も、物質である限り、始めがあり、そして終わりが来るのです。その対応年数を人工的に早めるかのように、地球の危機が叫ばれている昨今、人類の生き方の結果である戦争や迫害、それにCO₂の温暖化による天変地異と、今日、聖書が語る「これらのこと」を一線上に捉えるのは早計と言うべきでしょうか？

典礼で祝う「終末」とは、私たち信仰者にとって、未来の出来事ではなく、今、現実の生き方として捉えるべき出来事に他なりません。キリストが語る「その日」とは、正にそのための警告であることを信仰者は忘れてはならないのです。

世に悪や惨禍がはびこるのを、神が見逃しておられるのも、不信仰者には回心を、また、苦難のさなかにある人には堅忍を、「救いへの清め」として神が待っておられる「いつくしみの期間」と捉えるべきでしょう。信仰者が希望すべきは、目先の利益ではなく、キリストによる最終的な「魂の救い」だからです。

「その日」には、キリストに望みをかけている人たちは、地の果てから天の果てまで一つに集められ、「天上の宴の人」とならせていただけることを聖書は記しています。だから、「その日」のために信仰者は、すべての現実を、神の心に委ね、御心が地でも行われるように祈りつつ、心の平安を保つよう心がけるのです。

「いちじくの木から教えを学ぶようにこれらのことが起るのを見たら、人の子が近づいていると悟りなさい」との主の警告は、くれぐれも、人類への脅しではなく私たちを心の平安のうちに救いに与らせるための、人類を愛してやまない神のラブコールであることを心に留めて、感謝のうちに、「王であるキリスト」を迎えることが出来る恵みを私たちのみ母マリア様に願いましょう。

2021年 11月 14日 主任司祭 昌川信雄